

あとがき

編集委員 佐島 群巳

○ 今 ここに ありて

私は、今、日本環境教育学会の一人の会員として、一人の学会誌編集委員として、そして、一人の大学教師として、自らのおかれている立場について問うことが多い。

その中でも、第一に今問うことは、「学生への向かい合い方」である。学生に腹の底から納得させる語りができているか。学生自らを啓発する動機付けたり、学びの方向性を見つめたり、課題追求の方法を身につけたりする指導ができたかどうか、とふりかえっている。

学生は、豊かな社会で、与えられることに馴らされている。つくられた（既成の）環境の中でのみ、唯、動き、与えられたメニューを消化する、ということに習慣化させられてきた。いつの間にか「今 ここに ありて」どう動き、学生は何をどのように追及していったらよいか、と主体的に学びの行動が衰退しているのである。

そこで、学生には、仮に他者から与えられた課題であったとしても、その課題を自らの問いと受け止め、「予測的に結果を見通しどこまでも追求する」学習意欲と態度を身につけさせたいと願って、日々学生と向かい合っている。

確かに、バブル崩壊を期に、若者は生きる意欲と目的を喪失したといわれている。しかし、学び方の手法を繰り返し用いたり、学ぶ対象を他人事としないで、自分の物として取り組むことを勧めていることによって、学びのスタイルが徐々に変わるのである。いわゆる「課題や行動」の転換を図ることができるのである。

○ 教育研究をふりかえる

私の第二の問いは、学生の学び方だけではない。私たちの原理研究と実践研究との間の結びつきについてである。前者はロジックの問題であり、後者はハウツウの問題である。つまり、この両者の関係が意識化されないために、教育の不毛性が問

われる所以である。

教育研究は、上記の両者が矛盾・対立するものでない。むしろ、教育実践の累積的・縦断的研究、横断的・比較的研究を通して、共通のロジックが生まれるからである。従って、環境教育研究は教育的現象としての「子ども・学校・社会・地球の要請」をふまえた「生涯社会に生きるための力」を育てるために、「有効な教材開発の活用効果」を「子どもの意識・認識・能力の変容過程」から評価し、「学習の原則・論理を導き出していく作業」を怠ってはならない、と考える。

かつて、私は、「日本環境教育学会10周年記念誌」(MAR. 2001)に「草創期から21世紀への学会へ」の論考を寄せた。そこでは、学会誌に掲載された論文・報告(1991～2000)を解析した。

原著論文には、二つの研究対象・領域がある。

- ①原理的研究…環境教育の体系化、環境教育の意義、環境思想倫理など
- ②実践方法的研究…環境教育カリキュラム、教材開発、授業研究など

報告には、環境教育の事例研究、諸外国の環境教育の紹介、環境教育の情報などが提示されている。

本学会設立経緯から考えて、学会は純粋なる研究者集団ではない。環境問題、教育問題、人間の在り方など多様な要求水準から必然的に生まれた学会である。学会誌に投稿されるものも多様で、親学問が不確実な中で査読は容易ではない、という実感である。

○ 最後に問う

本学会は、既に日本学術会議に「研究団体」として認定されている。

今後、改めて「学としての存在意義」について検討する必要がある。広領域の教育科学としての研究対象・方法を多面的・総合的に明らかにしたいものである。

そして、学会は、社会的貢献面、人間形成面などからの検討が急務である、と自問しているところである。